

令和3年度(2021年度) 読み解くカプロジェクト研究

「読み解く力」の育成に重点を置いた、 全ての児童生徒が学びを実感できる授業づくりⅢ

ーICTを効果的に活用し、よりよく「再構築」をすることを通してー

内容の要約

令和元年度から「読み解く力」の視点を踏まえた授業づくりに取り組み、児童生徒が「読み解く力」を、高め、発揮できる授業づくりのポイントを明らかにしてきた。

3年目を迎える本研究では、「再構築」のプロセスに焦点を当て、研修と実践の往還を通して、児童生徒がICTを効果的に活用し、よりよく「再構築」をする授業づくりの視点を見いだした。その視点を基に授業改善を行ったことで、全ての児童生徒が学びを実感できる授業となり、各教科等で目指す資質・能力の確かな育成につながった。

キーワード

「読み解く力」
学びの実感

ICTの効果的な活用

よりよく「再構築」をする
各教科等で目指す資質・能力の育成

目		次	
I	主題設定の理由	(1)	V 研究の進め方 (5)
II	研究の目標	(2)	1 研究の方法 (5)
III	研究の仮説	(2)	2 研究の経過 (5)
IV	研究についての基本的な考え方	(2)	VI 研究の内容とその成果 (5)
1	「読み解く力」の育成に向けて	(2)	1 研修と実践の往還 (5)
2	児童生徒がよりよく「再構築」をすることについて	(3)	2 ICTを効果的に活用し、よりよく「再構築」をする授業づくりの実
3	全ての児童生徒が学びを実感できる授業づくりについて	(3)	際 (8)
4	学びを実感する児童生徒の姿の検証について	(5)	3 指導者と児童生徒の変容 (12)
			VII 研究のまとめと今後の課題 (14)
			1 研究のまとめ (14)
			2 今後の課題 (14)
			文 献

滋賀県総合教育センター

野本幸造 前田顕吾

各教科等で目指す資質・能力の確かな育成

全ての児童生徒が学びを実感できる授業



自己の変容を捉える



個別最適な学びと協働的な学びを組み合わせる



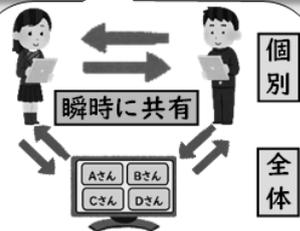
再構築を積み重ねる



見方・考え方を働かせる

児童生徒が主体

ICTを効果的に活用し、よりよく **再構築** をする授業づくり



学習活動を蓄積



多様な情報を収集

自分なりに解決し、知識を再構築する

分析・整理
情報を比較し、関連付けて整理する

発見・蓄積
必要な情報を確かに取り出す

課題解決に向けた目的意識

「読み解くカ」マネジメントシート

「読み解くカ」マネジメントシート(〇学校)		(担当者: 〇学校)	
学校教育目標	P	児童の実態	P
校内研究主題	P	指導の重点	P
「読み解くカ」の育成を図る授業について	P	校内研修や授業準備を通して	D
「読み解くカ」の育成を図る授業について	P	自身の実践を通して	C
「読み解くカ」の育成を図る授業について	P	「読み解くカ」の育成を図る授業について	A

単元目標	単元の流れ	児童生徒の姿
	手立て	A B
	ICTの活用	① ①
		② ②
		③ ③

単元構想シート

授業ナビシート	見取りとフィードバック
授業ナビシート	見取りとフィードバック

再構築をする具体的な姿の想定



令和3年度プロジェクト研究
令和2年度プロジェクト研究
令和元年度プロジェクト研究

研修
プロジェクト
研究会



実践
日々の
授業実践



【「第Ⅱ期 学ぶ力向上滋賀プラン」(平成31年3月)】

「読み解くカ」を二つの側面から捉え、三つのプロセスとして構造化し、「読み解くカ」の視点を踏まえた授業づくりの取組を推進する

【小・中学校学習指導要領(平成29年告示)解説】

知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう過程を重視した学習の充実を図る

読み解く力プロジェクト研究

「読み解く力」の育成に重点を置いた、 全ての児童生徒が学びを実感できる授業づくりⅢ

—ICTを効果的に活用し、よりよく「再構築」をすることを通して—

I 主 題 設 定 の 理 由

小・中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 総則編では、児童生徒が各教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせながら、「知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう過程を重視した学習の充実を図ること」^{1) 2)}と示されており、学習過程の中で児童生徒が自分の考えを深めたり創造したりすることの重要性が述べられている。

本県では、子ども一人ひとりの学ぶ力を高め、確かな学力の向上を図ることを目的として、「第Ⅱ期学ぶ力向上滋賀プラン」(平成31年3月)を策定した。その中で、児童生徒の「読み解く力」を「主に文章や図、グラフから読み解き理解する力」と「主に他者とのやりとりから考えや意図を読み解き理解する力」の二つの側面から捉え、必要な情報を確かに取り出す「①発見・蓄積」、情報を比較し、関連付けて整理する「②分析・整理」、自分なりに解決し、知識を再構築する「③再構築」の三つのプロセスとして構造化し、「読み解く力」の視点を踏まえた授業づくりの取組を推進してきた。

当センターでは、令和元年度から「読み解く力」の視点を踏まえた授業づくりに取り組み、児童生徒が「読み解く力」を、高め、発揮できる授業づくりのポイントを明らかにしてきた。特に令和2年度は、「分析・整理」のプロセスを重視した授業づくりの視点を数多く見だし、各教科等で育成する資質・能力を明確にしたうえで、児童生徒が「発見・蓄積」したことを、どのように「分析・整理」すると「再構築」につながるのかについて具体的に想定した授業を実践することができた。しかしながら、令和2年度に読み解く力推進委員¹⁾を対象に実施した質問紙調査では、三つのプロセスにおいて「児童生徒は『読み解く力』を、高め、発揮しているか」を問う質問項目に対し、「当てはまる」もしくは「やや当てはまる」と回答した指導者の割合は、「発見・蓄積」で87%、「分析・整理」で78%であったが、「再構築」では、61%と最も低く、「再構築」のプロセスに課題が残る。さらに、研究を進めていく中で、児童生徒が学びを実感するためには、児童生徒が主体となり、どのような学習過程を辿ったかを児童生徒自身が意識をして学びを進めることが大切であるということが分かった。そこで、3年目を迎える本年度は、児童生徒が主体となり、学習課題の解決に向けた筋道を立てて学びを進めることをよりよく捉え、児童生徒がよりよく「再構築」をするという点を重視して、全ての児童生徒が学びを実感できる授業づくりを追究していくことで、読み解く力プロジェクト研究の集大成とする。

加えて、令和3年1月に出された中央教育審議会「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して(答申)」では、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげるために、学校教育の基盤的なツールとしてICTは必要不可欠なものであることが示された。本研究においても、「読み解く力」の二つの側面と三つのプロセスにおいて、ICTを効果的に活用することにより、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させ、よりよく「再構築」をすることにつなげたい。

これらを踏まえ、研修と実践の往還により、ICTを効果的に活用し、よりよく「再構築」をすることを通して、全ての児童生徒が学びを実感できる授業を目指し、各教科等で目指す資質・能力の確かな育成につなげる。

i) 読み解く力推進委員とは、市町教育長から推薦された小中学校の教員のことを指す(令和2年度は41名、令和3年度は42名)。読み解く力推進委員は、各市町へ「読み解く力」の視点を踏まえた授業づくりの普及を行う。

Ⅱ 研究の目標

研修と実践の往還により、「読み解く力」における「再構築」のプロセスに焦点を当て、ICTを効果的に活用し、よりよく「再構築」をすることを通して、全ての児童生徒が学びを実感できる授業を目指す。そして、各教科等で目指す資質・能力の確かな育成につなげる。

Ⅲ 研究の仮説

「読み解く力」における「再構築」のプロセスに焦点を当て、ICTを効果的に活用し、よりよく「再構築」をすることを通して、全ての児童生徒が学びを実感できる授業となり、各教科等で目指す資質・能力の確かな育成につなげることができるだろう。

Ⅳ 研究についての基本的な考え方

1 「読み解く力」の育成に向けて

本県では、「読み解く力」を、図1のイメージ図で表し、「読み解く力」の視点を踏まえた授業づくりの取組を推進している。

当センターでは、「読み解く力」は、児童生徒が本来持っている力であり、学習経験や生活経験を通して、高め、発揮するものであること、また、「読み解く力」を育成するとは、指導者が授業を通して児童生徒の「読み解く力」を、高めたり、発揮したりすることができるようにすることとして、授業づくりの研究に取り組んできた。1年目の研究では、「読み解く力」の育成に重点を置いた授業づくりのポイントとして、「単元や授業で付けたい力を明確にすること」、「『読み解く力』を、高め、発揮している児童生徒の姿を具体的に想定し、単元や授業を構想すること」等が見いだされた。2年目の研究では、特に「分析・整理」のプロセスを重視した授業づくりについて取り組み、「既存の知識に新たな知識を付け加えること」、「やりとりの目的や視点を明確にすること」等の具体的な授業づくりのポイントが見いだされた。

過去2年間の研究を踏まえ、本研究では、ICTを効果的に活用し、よりよく「再構築」をすることを通して、全ての児童生徒が学びを実感できる授業づくりに取り組む。なお、本研究における児童生徒が学びを実感できる授業とは、児童生徒が、基礎的・基本的な知識・技能を習得し、その知識・技能を活用して課題を解決することで「わかった」「できた」と実感できる授業とする。

また、本研究においては、二つの側面と三つのプロセスに関わって、例えば「A 主に文章や図、グラフから読み解き理解する力」の側面に関わる「①発見・蓄積」のプロセスを「A①」のように表記する。



図1 「読み解く力」イメージ図

2 児童生徒がよりよく「再構築」をすることについて

「再構築」をするとは、児童生徒が解釈した内容を経験や知識と結び付けたり、他者とのやりとりを通して、相手の思いや意図を踏まえたりしながら、自分の考えを深めたり創造したりすることである。本研究において、よりよく「再構築」をするとは、児童生徒が主体となり、学習課題の解決に向けた筋道を立てて「再構築」をすることをいう。学習課題の解決に向けた筋道を立てるとは、実際に何が分かり、何ができるようになったかを個々で振り返り、次は何をすればよいのか、どのように学習を進めるとよいのかを考え、学習が最適となるように調整することである。

例えば、小学校第5学年国語科の「読むこと」の学習において、「文章を読んでまとめた意見や感想を共有し、自分の考えを広げる」という資質・能力を育成するために、鑑賞文を書くことで物語の魅力を伝え合うことを単元のゴールに設定する。児童自らが単元のゴールを見据え、どのように学習を進めていけばよいかを意識して学習を進める。児童は、自身の学びに適した読書経験が似通った者を自ら選び交流し、自分の解釈した内容と相手の解釈した内容を比較・検討する。そして、対象と言葉の関係を言葉の意味、働き、使い方等に注目して捉えたり問い直したりするという見方・考え方を働かせながら「再構築」をし、自分の考えを広げることができる。

指導者は、一人ひとりの児童生徒によって、学習課題の解決に向けた筋道は異なるということを念頭に置きながら、児童生徒の学習の過程やよりよく「再構築」をする姿を見取る。見取った姿から、児童生徒の見方・考え方が働いているか、どのように次の学びに生かしていけるのかを検討し、個に応じたフィードバックを行う。例えば、児童生徒の記述したワークシートやノート、1人1台端末での意思表示、発言や態度から、学習課題の解決に向けて学びを進めることができているかどうかを指導者が把握し、児童生徒の学びの実態に即した助言を行うことにより、児童生徒が次の学びに生かすことなどが考えられる。このように個々の姿を見取り、個に応じたフィードバックを繰り返すことで、全ての児童生徒がよりよく「再構築」をすることにつながる。

3 全ての児童生徒が学びを実感できる授業づくりについて

研修として、年間5回のプロジェクト研究会を実施し、トータルアドバイザーによる講義や研究委員同士の協議を通して、児童生徒がよりよく「再構築」をするためのめあてや課題の設定の仕方、授業展開や手立てのあり方等を見いだす。まず研究始期に「再構築」のプロセスの定義について研究委員と共通理解し、よりよく「再構築」をする児童生徒の姿をイメージする。そして、実践として、研修で見いだした授業づくりの視点等を生かして、授業実践を行う。実践後のプロジェクト研究会において、実践について省察し、さらなる実践へ向けた新たな視点をつかむ。このように、研修と実践を往還することで、児童生徒がよりよく「再構築」をすることを通して、全ての児童生徒が学びを実感できる授業づくりを追究する。

(1) ICTの効果的な活用

「読み解く力」の二つの側面と三つのプロセスにおいて、ICTを効果的に活用することで次のようなことが可能となると考える。

「発見・蓄積」のプロセスでは、児童生徒が課題を解決するために、インターネットから、多様な情報を素早く収集し、目的に応じて必要な情報を取り出すことや、1人1台端末のカメラ機能を活用して、学習対象や学習活動を撮影し、蓄積していくことができる。「分析・整理」のプロセスでは、「発見・蓄積」した情報を瞬時に他者と共有することで、十分な時間をかけて他者の意見と自分の意見を比較・検討することや、コンピュータや大型提示装置等を活用して、意見を効果的に提示することで、グループ内でのやりとりを通して思考を深めながら、意見を整理することができ

る。そして、「再構築」のプロセスでは、「発見・蓄積」「分析・整理」のプロセスを経て、児童生徒が1人1台端末に蓄積したものを活用して、自分の考えを深めたり、創造したりすることができる。さらに、蓄積したものを基に、学習課題の解決に向け立てた筋道を辿っているかを適宜振り返ることで、よりよく「再構築」をすることができる。

例えば、小学校第5学年体育科の器械運動領域のマット運動の学習において、自身の動きを高める活動では次のような学習過程が考えられる。個々の児童生徒が、目標を明確にし、学習の見通しをもったうえで、1人1台端末を用いて体の動きを録画したり、技の様子を写真や動画で収集したりして、自身が選んだ技に関わる体の動きについて「発見・蓄積」をする。さらに、録画したものをペアや全体で共有し、体の動きの特性に着目するという見方・考え方を働かせながら他者と自分の体の動きを比較することで、選んだ技に必要な体の動きについて「分析・整理」をする。そして、「分析・整理」をしたことを基に、選んだ技に必要な体の動きを繰り返すことで、自身が選んだ技を身に付けるという「再構築」をする。単元を通して、1人1台端末を用いて蓄積した学習履歴から、前時と本時の体の動きや、単元の始めと終わりの体の動きを比較することで、適宜、学習課題の解決に向けた筋道を見直すことができ、これはよりよく「再構築」をすることにつながる。

(2) よりよく「再構築」をする授業づくりの工夫

児童生徒がよりよく「再構築」をするために、「読み解く力」の視点を踏まえて二つの側面と三つのプロセスをどのように関連付けるかを意識して授業を構想する。

授業づくりを進めるにあたり、学校や学級の児童生徒の実態を把握し、年間を見通して継続的・計画的に「読み解く力」を育成するために、令和2年度の研究で活用した「『読み解く力』マネジメントシート」(図2)を引き続き用いる。校内研究・授業参観等を通して学んだことや、自身の実践を通じた成果と課題を積み重ね、次の実践に生かすことで、児童生徒が「読み解く力」を、高め、発揮する授業づくりの視点を見だし、さらなる授業実践につなげるとい授業づくりのPDCAサイクルの確立を図る。

また、授業を構想する際には、令和元年度の研究から継続して活用している「単元構想シート」(図3)と「授業ナビシート」(図4)に、本年度からはICTの活用方法について記入する欄を新たに設けて用いる。

「単元構想シート」では、単元目標をもとに単元の流れを構想し、「読み解く力」の二つの側面と三つのプロセスにおいて、児童生徒が「読み解く力」を、高め、発揮している姿を具体的に想定する。その姿を実現するための手立てや工夫、ICTの活用方法等を記述する。

「授業ナビシート」では、単元全体の構想後、本時に育成したい資質・能力と本時のめあてを踏まえ、児童生徒の実態に応じて、児童生徒の反応を予測し、必要な手立てや工夫、ICTをどの場面で、何をねらいとして、どのように活用するのか等を記述する。

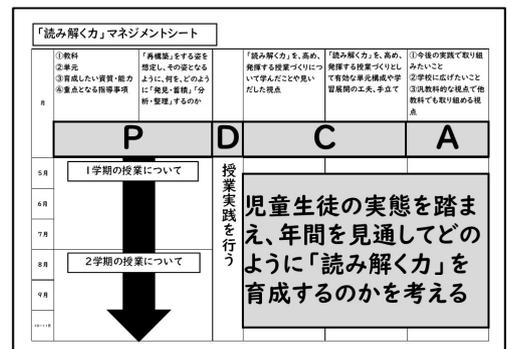


図2 「『読み解く力』マネジメントシート」

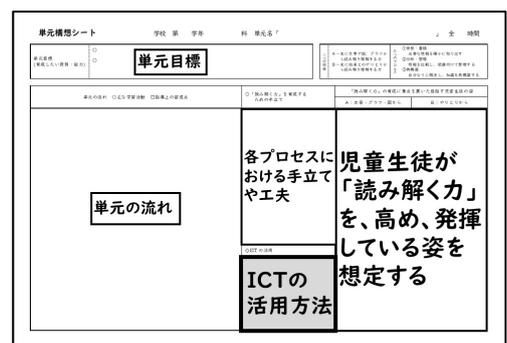


図3 「単元構想シート」

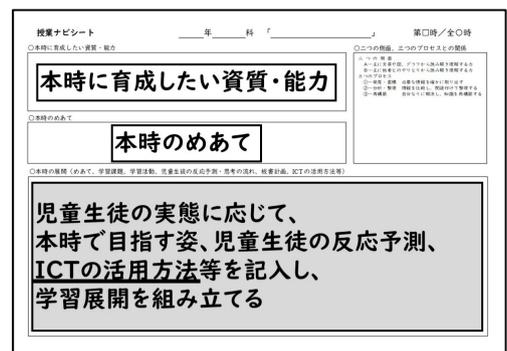


図4 「授業ナビシート」

4 学びを実感する児童生徒の姿の検証について

研究委員は、児童生徒の授業中の様子や振り返りの記述、学習成果物、児童生徒質問紙調査の結果等を基に、その授業や単元で育成したい資質・能力に照らし合わせながら、「読み解く力」を、高め、発揮している児童生徒の学びの姿を検証する。それにより、児童生徒がよりよく「再構築」をする授業において、どのような視点や手立てが全ての児童生徒に学びの実感を生み出し、各教科等で目指す資質・能力の確かな育成につながったかについてまとめる。

V 研究の進め方

1 研究の方法

- (1) 各関係機関、研究委員等と研究の方向性・内容、日程等の共通理解を図る。
- (2) 年間5回のプロジェクト研究会を行い、単元計画・学習指導案等の検討を行う。また、読み解く力推進委員を交えた授業研究会等(向上研修会ⁱ⁾)を行う。
- (3) 研究委員ⁱⁱ⁾は、プロジェクト研究会での研修と実践校における実践の往還を進め、児童生徒が、ICTを効果的に活用し、よりよく「再構築」をすることにつながる単元の構成や学習展開の工夫、手立てを具体的に明らかにしていく。
- (4) 読み解く力推進委員を対象に研究の始期と終期に2回の質問紙調査を行い、「再構築」のプロセスに焦点を当てた授業に対する意識の変容を追う。また、児童生徒対象の質問紙調査や、授業での発言、振り返りの記述、学習の成果物等から、学びを実感できるようになったかを分析し、研究の成果と課題をまとめる。
- (5) 研究の成果物として、「読み解く力」授業づくりガイドブックを作成する。

2 研究の経過

4月	研究構想、研究推進計画の立案	9月14日・16日	第4回プロジェクト研究会兼第2回向上研修会(小中別)【公開授業に向けた指導案検討、講義等】
5月～10月	実践校での実践	10月～11月	第3回向上研修会(ブロック別)【公開授業、授業研究および研究協議会、講義等】
5月14日	第1回プロジェクト研究会(小中合同)【研究の方向性、講義、今後の計画等】	6月8日・10日	第2回プロジェクト研究会兼第1回向上研修会(小中別)【公開授業参観、協議、講義等】
6月8日・10日	第2回プロジェクト研究会兼第1回向上研修会(小中別)【公開授業参観、協議、講義等】	11月25日	第5回プロジェクト研究会(小中合同)【研究のまとめ、講義等】
6月～7月	児童生徒質問紙調査・指導者質問紙調査(第1回)の実施と分析	11月～12月	研究論文原稿執筆
8月6日	第3回プロジェクト研究会(小中合同)【1学期の実践交流、公開授業に向けた協議、講義、2学期の授業構想等】	1月	研究発表準備
		2月	研究発表大会
		3月	研究のまとめ

VI 研究の内容とその成果

1 研修と実践の往還

本研究の目標であるよりよく「再構築」をすることを通して、全ての児童生徒が学びを実感できる授業づくりを進めることができるよう、研修と実践を往還させながらプロジェクト研究会および向上研修会を6ページの図5のとおり計画・実施した。

i) 向上研修会とは、読み解く力推進委員を対象に年3回実施される「読み解く力」向上のための研修会を指す。

ii) 本研究の研究委員は、読み解く力推進委員の中から更に選出された小学校5名、中学校5名の教員のことを指す。

研修	実践
<p>第1回プロジェクト研究会 (5月14日：半日オンライン、半日総合教育センターで開催)</p> <p>昨年度までの研究の成果と課題から、「読み解く力」について共通理解を図り、課題を踏まえ、本年度の研究の方向性を共有した。</p>	<p>「読み解く力」の育成に向けた年間を見通した計画の作成</p> <p>『「読み解く力」マネジメントシート』を用いて、児童生徒の実態を踏まえ、年間を見通してどのように「読み解く力」を育成するのかを計画した。</p>
<p>第2回プロジェクト研究会兼第1回向上研修会 (6月8日：野洲小学校・総合教育センター) (6月10日：伊吹山中学校)</p> <p>小学校算数科、中学校外国語科の公開授業を参観し、実際の授業におけるよりよく「再構築」をする児童生徒の姿を共有し、その姿の実現に向けた授業づくりの手立てや工夫についてグループ協議を行った。また、トータルアドバイザーの講義から、「読み解く力」の育成に重点を置いた授業づくりの視点を見いだした。</p>	<p>よりよく「再構築」をする授業実践①</p> <p>研修でのトータルアドバイザーの講義やグループ協議等から見いだした授業づくりの視点を基にして、授業実践①を行った。センター所員が授業を参観した後、授業に対する振り返りの時間を設け、研究委員の授業改善につなげた。</p>
<p>第3回プロジェクト研究会 (8月6日：総合教育センター)</p> <p>1学期の授業実践について振り返り、児童生徒がよりよく「再構築」をする授業について成果と課題を交流した。その成果と課題を踏まえ、授業実践②について、「単元構想シート」を作成し、児童生徒がよりよく「再構築」をして、「読み解く力」を、高め、発揮する授業を行うためにどのような手立てや工夫を取り入れるのか、授業の構想を立てた。その後、トータルアドバイザーより指導助言を受けた。</p>	<p>授業実践②に向けた「単元構想シート」、「授業ナビシート」、学習指導案の作成</p> <p>第3回プロジェクト研究会での研究協議、講義を踏まえて見いだした視点を生かし、授業実践②の「単元構想シート」、「授業ナビシート」、学習指導案を作成した。</p>
<p>第4回プロジェクト研究会兼第2回向上研修会 (9月14日・16日：オンラインで開催)</p> <p>授業実践②の「単元構想シート」、「授業ナビシート」、学習指導案の検討を推進委員と研究委員とで行った。その後、トータルアドバイザーから指導助言を受け、授業改善の具体的な方策を見いだした。</p>	<p>「単元構想シート」、「授業ナビシート」、学習指導案の修正</p> <p>トータルアドバイザー・指導主事等からの指導助言を踏まえて、「単元構想シート」、「授業ナビシート」、学習指導案を修正した。</p>
<p>第3回向上研修会 (授業実践②) (10月～11月：各実践校)</p> <p>県内5ブロックの小・中学校において、授業実践②を行った。よりよく「再構築」をする児童生徒の姿等を通して、「読み解く力」の育成に重点を置いた授業づくりの視点や、「再構築」のプロセスを重視した単元の構成や学習展開の工夫、講じた手立てについて検証した。</p>	
<p>第5回プロジェクト研究会 (11月25日：総合教育センター)</p> <p>1年間の実践のもとに、児童生徒がよりよく「再構築」をする授業づくりのどのような手立てや工夫が児童生徒の学びの実感を生み出し、各教科等での資質・能力の確かな育成につながったかを検証し、今後の実践につなげられるように整理した。</p>	<p>年間の振り返り、まとめ</p> <p>第5回プロジェクト研究会で整理したことを基に、1年間の実践を振り返り、「読み解く力」の育成に重点を置いた授業づくりについて成果と課題をまとめ、今後の実践につなげることとした。</p>

図5 本研究における研修と実践の往還

(1) 年間を通して授業づくりのPDCAサイクルを確立した指導者Aの実際(小学校第4学年算数科の事例)

研究委員は、半年間のプロジェクト研究の取組を経て、「読み解く力」の育成に重点を置いた授業づくりの方向性を見いだした。研究委員である指導者Aは、児童が主体となる授業の実現に向けて、小学校第4学年算数科において実践に取り組んだ。年間を通してどのように授業づくりを進めたかについて、指導者Aの実践事例を基に示す(図6の「カ」)。

P		D	C	A
月	①教科②単元 ③育成したい資質・能力 ④重点となる指導事項	想定している児童の「再構築」をする姿	自身の実践を通して	見いだした授業づくりの視点【今後取り組みたいこと】 ア
5	6月の授業実践 ①算数科	交流した友達の考えを自分の考えに取り入れて、適用問題で試したり、考えをまとめたりしている	イ	・児童に目的意識をもたせ、交流の必然性を感じさせる
6	②角度 ③角の大きさについて、既習の測定の考え方を基にして、方法を考えることができる		・これまでの授業スタイルでは、個に合った学びが難しく、学びの実感につながらない	・個々の児童が授業で学んだ知識を活用する授業づくり ウ
7	④角の測り方 角のかき方		・課題の解決に向けて必要な情報を集めるために主体的に交流して、学びを進める授業が大切である ・ICTが効果的に活用できていない	エ
8	11月の授業実践 ①算数科	自分の考えと友達の考えを比較・検討し、図形の形に適した解き方を選択して面積を求めている		・指導者がさせるのではなく、児童が主体となる授業へのソフトチェンジを図る ・ICTを活用することで個々の学びをつなげる
9	②面積 ③既習の解き方を使って面積を工夫して求めることができる		・児童が自ら交流相手を選ぶようにすると、児童が主体となる姿が増えた ・ICTを活用して児童の考えをつなげることで、意図のある交流が生まれた	・ICTを活用して全員の考えを共有することで、児童が自分で交流の相手を判断し、動き出す授業づくり オ
10	④正方形、長方形の面積の求め方		・児童が主体となることで、学びを実感する児童が増えた ・ICTを活用することで、児童自身が全体から交流相手を選んで交流し学習を進めることができる	・児童が主体となり、学びを進めることを目指して授業づくりを行う ・ICTを活用することで個々の学びが可視化でき、交流に必然性が生まれる
11	カ			
11	・児童が「読み解く力」を、高め、発揮するために、これまでも児童が主体となる授業づくりに取り組んできたが、児童の具体的な姿とつながっておらず、「個別最適な学び」となっていなかった。指導者が活動を区切るばかりの形式的な授業ではなく、どの児童も自ら判断し動き出すといった児童が主体となる授業を重視することで、「個別最適な学び」が成立し、児童同士が考えを交流する「協働的な学び」へとつながり、よりよく「再構築」をすることができる授業となることが分かった。今回ICTを活用することで、指導者が児童同士をつなぐのではなく、児童同士が目的をもってつながることができ、指導者が教える授業から児童が学ぶ授業へと向かうことができた。			

図6 指導者Aの「『読み解く力』マネジメントシート」(A3判ヨコ)を本論文用に形式変更したもの(記号と下線は筆者)

5月の第1回プロジェクト研究会後に指導者Aは、「『読み解く力』マネジメントシート」(以下、「マネジメントシート」という。)を活用して学習単元の系統性や児童の資質・能力を踏まえた年間を通した長期的な学習計画と、「単元構想シート」を活用して短期的な単元計画を立てた。研究会後の「見いだした授業づくりの視点」の欄には、「児童に目的意識をもたせ、交流の必然性を感じさせる」との記述が見られた(p.6の図6の \square ア)。

6月に「角度」(教材名「角の大きさを調べよう」大日本図書)の単元において、指導者Aは「単元構想シート」を活用し、児童が目的意識をもち、必然性のある交流をする姿を目指して図7の \square アのように授業を構想した。しかし授業を実践したところ、児童が学習活動に目的意識をもち、必然性のある交流をする姿があまり見受けられなかった。実践後、研究協議会での意見やトータルアドバイザーの助言から、指導者Aは「困っている児童が一方向的に聞き役となる全体交流を行う既存の授業スタイルでは個に適した

学びが難しく、学びの実感につながらない」と課題を振り返り(p.6の図6の \square イ)、全ての児童が学びを実感するためには、学習課題を達成できるような「個々の児童が授業で学んだ知識を活用する授業づくり」が大切だと考えた(p.6の図6の \square ウ)。

	ア 6月「角度」	イ 11月「面積」
「読み解く力」を、高め、発揮する姿	「角度」の用語とその意味や求め方を理解し、身の回りにある図形を角の大きさに着目して捉えようとしている	図形を構成する要素に着目し、より簡潔・明瞭・的確な表現で図形の面積の求め方を考察している
「読み解く力」を育成するための手立てや工夫	・自分の力で課題を解決する時間を確保する ・体育科「マット運動」と関連させることで必然性を感じるようにする	・「陣取りゲーム」を題材とした学習課題を設定することで、児童が目的意識をもつようにする ・「陣取りゲーム」の中に学習する図形を組み込む
ICTの効果的な活用方法	課題を大型提示装置で共有し、解決への見通しをもつ	個々の考えを全体で共有し、児童が自分で交流の相手を選択する

図7 指導者Aの作成した「単元構想シート」「授業ナビシート」の一部

8月の第3回プロジェクト研究会では、11月に授業実践をする「面積」(教材名「広さの表し方を考えよう」大日本図書)の学習指導案について検討を進めた。指導者Aは個々の児童が授業で学んだ知識を活用することをねらいとし、話し合いを生かしてまとめ、適用問題に取り組むことをよりよく「再構築」をする学習活動として設定した。研究会においてトータルアドバイザーは、「課題の解決に困った児童が必要な情報を集めるために主体的に交流し、学びを進めることが重要である」と指摘された。これを受け、指導者Aは「個々の児童が学びの主体となり、学習を進める」という視点を捉え直し、学習計画の見直しを行った。研究会後に、「これまでは考える場面、話し合う場面を教師が区切り、全員で一斉に授業を進めていたので『個別最適な学び』ではなかった。個々の児童が最適な学びを選択し、『協働的な学び』と一体的に取り組むことで、児童が主体となり、よりよく『再構築』をする授業を実現していきたい」と述べ、「マネジメントシート」に「指導者がさせるのではなく、児童が主体となる授業へのシフトチェンジを図る」と記述した(p.6の図6の \square エ)。

11月の授業実践に向けては、8月の研究会で見いだした児童が主体となる授業とするために、「単元構想シート」と「授業ナビシート」を活用して図7の \square イのように授業を構想した。単元における児童が主体となる手立てとして、勝敗のあるゲームを取り入れることで、児童が学習活動に目的意識をもつようにした(図8)。ICTの効果的な活用として、1人1台端末を用いて全員の考えを画面に映すことで、個々の考えを共有し、児童が自分で交流の相手を選択する活動を設定した。授業実践では、課題の解決に向けて児童は個で課題と向き合い、必然性のある交流によって協働的に学習を進めてよりよく「再構築」をすることができた。実践を終えた指導者Aの「マネジメントシート」の「A」の欄には、「児童が主体となり、学びを進めることを目指して授業づくりを行う」という記述が見られた(p.6の図6の \square オ)。さらに、6ページの図6の \square カ)の記述からは、児童が主体となる授業を捉え直し、今後の授業づくりに向けて



図8 学習課題の工夫

6ページの図6の \square カ)の記述からは、児童が主体となる授業を捉え直し、今後の授業づくりに向けて

方向性を見いだしていることがうかがえる。

指導者Aは「マネジメントシート」を活用して、実践を省察して課題を明確にし、「読み解く力」を、高め、発揮する授業づくりの視点を見いだした。その視点を基にして、「単元構想シート」「授業ナビシート」を活用し、児童の「読み解く力」を発揮している姿とその姿に向けた手立てを具体的に想定し、授業実践を行った。このようにして年間を通して授業づくりのPDCAサイクルを確立することができ、そのことは児童が主体となる授業づくりを促進することにつながった。

(2) 研究委員が見いだした授業づくりの視点

研究委員がプロジェクト研究会を通して見いだした、児童生徒がよりよく「再構築」をする授業づくりの視点を以下の表に示した。研究委員は自らの授業を振り返り、これらの視点を基に試行錯誤しながら授業改善を行った。

表 プロジェクト研究会を通して見いだした、児童生徒がよりよく「再構築」をする授業づくりの視点
※①～④は、後述の2(1)～(4)の事例に対応しており、特に指導者が意識した視点を表す

ICTの 効果的な 活用	<ul style="list-style-type: none"> ○教室やグループでの大勢の考えを、距離を問わずに瞬時に共有すること(①) ○児童生徒が根拠を明確にして他者とやりとりをするために、1人1台端末に学習したことを蓄積していく習慣を身に付けること(②) ○1人1台端末に記録したことを基に、考えをアウトプットする途中過程を見取り、個に応じたフィードバックをすること(③) ○「何のためにどの場面でICTを活用するのか」を指導者が児童生徒と共有すること ○多様な情報、最新の情報を、いつでもどこでも素早く収集すること(④) ○1人1台端末を用いて、活動の途中の段階や特徴的な様子を記録したことを基に、活動の流れや思考のプロセスを確認することで、表現の過程での子どもの姿を捉えやすくなること ○以下のような利点を生かして、ICTを活用すること <ul style="list-style-type: none"> ・遠隔地との交流や、過去の変容の見取り等、時空間を超えることができる ・複数のデータを統合的に取り扱うことで客観的に判断ができる
目的意識	<ul style="list-style-type: none"> ○指導者が「させたい」ではなく、児童生徒が「やってみたい」と思える課題を設定すること(④) ○受け身ではなく、児童生徒一人ひとりが課題を自分事と捉え、興味や関心をもって学習を進めること ○児童生徒が明確な目標をもち、その目標を達成する経験を積み重ねることで、より学びを実感していくこと
学習展開 学習過程	<ul style="list-style-type: none"> ○ペア・グループ学習で交流した内容を基に、個々の児童生徒ごとに構築する時間を確保すること ○目的意識や必要性をもったペア・グループ活動を取り入れ、学ぶ必然性を実感できる学習過程とすること ○「何を学んだのか」「どのように学んだのか」、学びの手応えを終末に感じる学習展開を設定すること(①)(④) ○単元のゴールを見据え、1単位時間のスモールステップでの積み上げを大切にすること(③) ○児童生徒が自分なりに課題解決を図り、他者と共有したり、価値に照らし合わせたりして何が適切か、みんなで共有していくこと(①) ○実験から分かったことを考察し、全体共有したものから学級で結論を導き出し、自分の身近なものに当てはめていくこと
学びの調整	<ul style="list-style-type: none"> ○児童生徒が、学習の進め方を自ら調整できる場面設定をすること(②) ○児童生徒が、自己の中での気づきや学びの実感を強く感じることで、自己調整をする力が高まり、よりよく「再構築」をすることにつながる(③) ○学習の見通しをもつために、児童生徒自身が学習のプロセスを意識してゴールを見据えて取り組むこと(②)
その他	<ul style="list-style-type: none"> ○主体的な学びを支える学習集団づくりをすること ○ポジティブフィードバックを継続することで、自発的に学ぶ集団に育成すること

2 ICTを効果的に活用し、よりよく「再構築」をする授業づくりの実際

(1) 自己の変容を捉えてよりよく「再構築」をする(中学校第3学年社会科の事例)…①

中学校第3学年社会科の学習(教材名「個人の尊重と日本国憲法」日本文教出版)では、単元目標を「個人の尊重と公共の福祉を観点として、他の人の考えを参考にしながら自分の考えを表明するなど、現代社会に見られる課題の解決を視野に主体的に社会に関わろうとする態度を養う」と設定した。その単元目標の達成に向けて、社会的な問題の実例として「道路建設をめぐる対立」を取り上げ、「道路建設は公共の福祉にあたるのか」の視点から、立ち退きを拒否する側と立ち退きを求める側の対立の原因と主張、根拠を整理しながら、「道路の拡張計画について賛成か反対かを理由とともに説明すること」を学習課題に設定した。

指導者Bは、よりよく「再構築」をする生徒の姿として、「『発見・蓄積』『分析・整理』のプロセスを経て自分の立場を明確にし、多面的・多角的に考察して、その過程や自分の考えを適切に表現している姿」を想定した。その姿を実現するために、次のような自己の変容を捉える手立てを取り入れた。

指導者Bは本単元の導入において、学習課題「道路の拡張計画について賛成か反対か」について問い、生徒は導入時点での自分の考えを1人1台端末に入力し、「瞬時に全体共有」を行った(図9)。その自分の考えを根拠をもって表現できるようにするという単元のゴールを明確にしたことで、生徒が主体となり、ゴールへ向けた筋道を立てた。生徒は、単元計画に沿って、新たに獲得した知識を1人1台端末やノートに蓄積し、それを基に改めて学習課題について賛成か反対かを考えるという「再構築」をした(図10の「ア」)。さらに、その考えを基に他者と交流を行い、もう一度自分の考えの「再構築」をした(図10の「イ」)。例えば、生徒aにおいては、図11のような考えの変容が見られ、蓄積した知識を基に多面的・多角的に考察し、他者との交流を通して、自分の考えを適切に表現することができた。導入時点での考えから、知識を蓄積していき、他者との交流を踏まえて「再構築」をした考えへの変容を、1人1台端末やワークシートを用いて振り返ることができるようにしたことで、自身の考えが何をもってどのように変化していったか、自己の変容を捉えることができた。それにより、生徒がよりよく「再構築」をし、学びを実感することとなり、単元で目指す資質・能力の確かな育成につながった。

自己の変容を捉えることに関して、トータルアドバイザーからは、「子ども自身が、何によって学びが変化したのかを確認しておくことで、同じような問題に直面したときに、この資料を参考にしよう、この人に聞いてみようという課題解決のときのリソースの在りかが明確になる。これからの社会を生きる子どもたちには、知識を詰め込むことよりも課題解決の方法を知っていることの方が重要なこととなる」との助言があった。

このように、自己の変容を捉える仕掛けを授業の中に取り入れることは、よりよく「再構築」をする授業づくりにおける一つの重要な視点であるといえる。

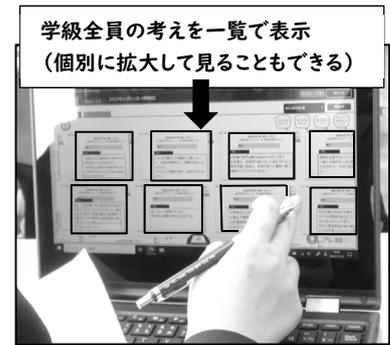


図9 他の生徒の導入時点での考えを確認する生徒

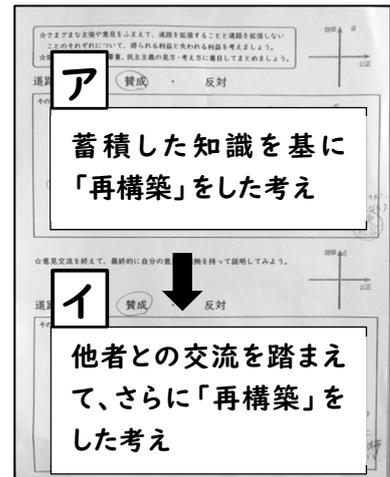


図10 考えの変容が見られるワークシート(1人1台端末に入力し全体共有)

学習課題	道路計画について賛成か反対か
①導入時点の考え	反対
理由	「思い出しには変えられない」
②蓄積した知識を基にした考え	反対
理由	「財産権の保障という観点で、住民に対する補償が不十分である。また、話し合いも不十分なまま決定するのはおかしい」
③他者との意見交流後の考え	賛成
理由	「住民と十分に話し合い、住民が納得することで公正さが守られる。道路建設の賛成が得られれば、住民を手厚くサポートすることで、住民の財産権が守られ、市の経済的な面でも大きなメリットがある」

図11 生徒aの考えの変容

(2) 「個別最適な学び」と「協働的な学び」を組み合わせよりよく「再構築」をする(小学校第2学年国語科の事例)…②

小学校第2学年国語科の学習(教材名「お手紙」光村図書)では、単元目標を「場面の様子に着目して、登場人物の行動を具体的に想像することができる」と設定した。

指導者Cは、よりよく「再構築」をする児童の姿として、「登場人物の行動や気持ちを具体的に想像するために、文章に付け足すとおきの一言を決めることで、より想像を膨らませている姿」

を想定した。その姿を実現するために、次のような手立てや工夫を取り入れた。

指導者Cは、想像したことを表現して理解し、理解したことをまた表現し、それを交互に繰り返すことで、知識及び技能と思考力、判断力、表現力等を一体的に育むことをねらい、言語活動としてペープサート(紙人形劇)を行うことにした。

単元の導入において、ペープサートの手本を動画で示して児童がゴールイメージを明確にもてるようにしたことで、児童が主体となり学習を進めることにつながった。また、指導者Cは児童と作成した単元の計画を教室に掲示し、学びの様子が一目でわかるように工夫して(図12)、児童が学んだことを発揮しやすい環境を整えた。

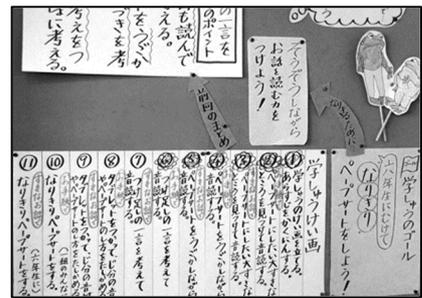


図12 教室に掲示した単元の計画

作品名							児童名
はるがきた	おはなし	なくしたポタン	すいえい	おてがみ	よていひよう	はやくめませ	
●	●	●	●	●	●	●	アイスクリーム
●	●	●	●	●	●	●	そのかどまで
●	●	●	●	●	●	●	そりすべり
●	●	●	●	●	●	●	がまくんのゆめ
●	●	●	●	●	●	●	こわくないやい
●	●	●	●	●	●	●	クッキー

図13 「並行読書マトリックス」

本時では、「場面の様子に着目して、登場人物の行動や会話について具体的に想像して読み、付け足しの一言を考えている」を目標として、導入の時間を短くすることで個での活動時間を確保することを重視した。児童が交流の相手を選ぶ際には、同一作者の他作品の読書履歴を一覧にした「並行読書マトリックス」(図13)を活用し、前時の「お手紙」で学んだことを生かして個で想像したことを書き込んだり、選んだ相手と協働的に音読を繰り返して認め合ったりするなど、目標に向けた筋道を立てて自分に適した学習活動を選択し、登場人物の様子や行動について学んだことを活用する姿が見られた(図14)。さらに、想像したことからおきの一言を決めることで、題材から具体的に登場人物の様子や行動を想像することにつながった。終末には1人1台端末に音読をしている姿を録画し合い、「学習活動を蓄積」とともに、個々の児童が自分の学習状況を視覚的に捉えるようにした。すると児童の中には、何度も撮り直し「これなら想像したとおりだ」と学びを実感する姿が見られた。



図14 選んだ相手と交流

このように「再構築」のプロセスにおいて、個で考えたことを友達と協働的に学び合い、また個に戻り考えてみるなど(図15)、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を組み合わせることで、よりよく「再構築」をすることができ、本時で目指す資質・能力の確かな育成につながった。

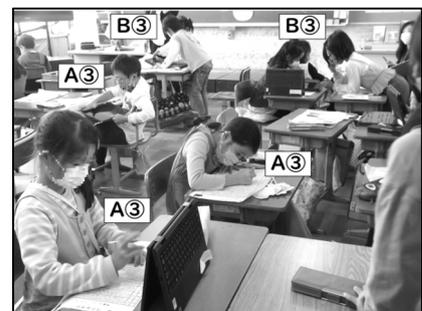


図15 個に応じた「再構築」の姿

(3) 指導者の見取りとフィードバックを基に「再構築」を積み重ねる(中学校第2学年外国語科の事例)…③

中学校第2学年外国語科の学習(教材名「Research Your Topic & Research and Presentation」東京書籍)では、単元目標を「ALTに自分たちのことをよりよく知ってもらうために、身近なトピックに関する調査とその結果発表を読んで理解し、自分たちのクラスで人気のあるものやことについて、その結果や自分の考えをまとまりのある内容で話すことができる」と設定した。

指導者Dは、本時のよりよく「再構築」をする生徒の姿として、「次の授業で行うALTへの発表に向けて、友達のアドバイスや中間指導等を生かし、調査結果や自分の考えをまとまりのある内容で友達に話すことができる姿」を想定した。その姿を実現するために、主体的な学びを支えるため

の学習集団づくりに取り組みながら、次のような手立てや工夫を取り入れた。

単元導入時に、ALTの「日本の中学生について教えてくれない？」という問いかけに答えることを単元のゴールとすることで、明確な目的意識をもつことができた。そして、その目的の達成に向けて、この単元で何をどのように学習すればよいか、生徒が主体となり、学習の筋道を立てて、単元を通した自分の目標をワークシートに記入した。さらに、ワークシートに毎時間のまとめと振り返りを記入し、蓄積することで、自己の学びを適宜確認し、自己調整することにつながった。また、指導者Dは、ワークシートから個々の生徒の学習状況を見取り、個に応じたフィードバックを計画的に継続して行うことにつながった。

本時では、ALTへの発表に向けて、グループ内で調査結果や自分の考えを、作成した資料やキーワードを頼りに発表し、よい点についてアドバイスをし合った。その際、生徒は発表している場面を1人1台端末を用いて相互に録画した(図16)。また、友達の発表のよい点を自分の発表に取り入れたり、自身の端末で動画を何度も見返すことで、伝えたい内容やその構成等について修正を行ったりした。

その後、中間指導として、指導者D(T1)やALT、指導者(T2)は、相手意識や自分の考え等の内容の工夫や文法的な誤り等の言語面のポイントを示し、それらを基に生徒は聞き手に分かりやすい展開や内容、伝え方になっているか吟味し、修正した。これを受け、再びグループごとに発表を行い、再度1人1台端末を用いて相互に録画した。一度目に録画した動画と見比べたり、グループ内でポイントに沿って再度アドバイスをし合ったりすることで、生徒は自己調整を図りながら、発表する内容面と言語面において質を高めることができた。また、中間指導をする中で、中間指導が生かしているかどうか個々の生徒を見取り、個に応じたフィードバックを行った(図17)。



図16 発表を相互に録画している場面



図17 指導者Dのフィードバック

さらに終末で、生徒が蓄積した動画の中からいくつかの場面を抽出し、その動画から見取った生徒の姿を価値付けながら、よりよい発表となるように本時のまとめを行った。言葉での説明に加え、実際の生徒の動画を基にまとめを行うことで、次時に行うALTへの発表に向けて、さらなる「再構築」が促された。

このように、ICTを効果的に活用して言語活動に繰り返し取り組み、「学習活動を蓄積」しながら、個人で「再構築」したものを中間指導等を踏まえ修正し、再び個人で動画を見直すなどして「再構築」をするという授業を行った。さらに、指導者Dが生徒の学習状況を的確に見取り、個に応じたフィードバックを行ったことで「再構築」が積み重ねられ、生徒はよりよく「再構築」をすることができ、本時で目指す資質・能力の確かな育成につながった。

(4) 教科の見方・考え方を働かせながらよりよく「再構築」をする(小学校第6学年図画工作科の事例)

…④

小学校第6学年図画工作科の学習(題材名「チャレンジ『鳥獣人物戯画』」)では、題材目標を「『鳥獣人物戯画』について見つけた面白さや特徴を共有したり、実際に描いてみたりすることを通して、古くから親しまれてきた日本古来の美術作品のよさや美しさを味わうことができる」と設定した。

指導者Eは、よりよく「再構築」をする児童の姿として、「『鳥獣人物戯画』について交流を通して自分なりのイメージをもち、形や色などの造形的な特徴に着目するという見方・考え方(以下、見方・考え方という。)を深めている姿」を想定した。その姿を実現するために、次のような手立て

や工夫を取り入れた。

指導者Eは、表現をすることで作品を鑑賞する活動を設定し、児童が見方・考え方を働かせて表現することで、作品のよさを味わう授業づくりを行った。

題材導入時に、児童は指導者Eが用意した「鳥獣人物戯画」の絵巻物のレプリカを鑑賞し(図18)、お気に入りの場面を選択して表現することで「鳥獣人物戯画」の魅力に迫るというゴールイメージを明確にもつとともに、児童が主体となりゴールに向けた筋道を立てることができた。まず、お気に入りの場面を1人1台端末で記録して友達と見せ合い感じたことを交流した後、その場面を模写することで、初めて絵画に出会ったときの感想を記録した。次に、活動時に沸き起こった動物の動きや表情の意図といった疑問に対して、学校図書館司書から「鳥獣人物戯画」についての知識を得て、理解を深めた。それらを踏まえて、自分が面白いな、表してみたいなと思うところを強調して、自分なりの「鳥獣人物戯画」を描くことに挑戦した。自分が絵画に出会ったときと、見方・考え方を働かせたときとの捉え方の変容を自覚することを通して、「鳥獣人物戯画」のもつよさに迫るようにした。

本時では、自分が見つけた面白さやよさを強調して絵に表すことで、見方・考え方を働かせて「鳥獣人物戯画」を鑑賞し、作品のよさに迫ることをねらいとした。自分が描いてみたいイメージをグループで交流してから、表したいものに合った用紙を選択して描き始めた。児童は、1人1台端末を活用し、「多様な情報を収集」した中で参考となる画像を見つけた。その後、写真を切り取ったり、写真に書き込んだりして描き進めた(図19)。中間交流では、「強調して描いてみると、また見え方が違ってくる」といった意見があり、見方・考え方を働かせながらよりよく「再構築」をすることにつながった。授業の振り返りでは、「今までは『すごいな』で終わっていたけれど、アレンジをすることで『初めに想像したことが実は違っていたのではないかと、新しい想像や見方が生まれた」と、見方・考え方を働かせて「鳥獣人物戯画」のよさを味わった記述(図20)が見られた。

このように、見方・考え方を働かせる学習を進めたことで、児童はよりよく「再構築」をすることができ、本時で目指す資質・能力の確かな育成につながった。



図18 導入でのレプリカの鑑賞



図19 鑑賞したことを基に表現している様子



図20 児童の表現と感想

3 指導者と児童生徒の変容

(1) 指導者の意識の変容

図21は、読み解く力推進委員を対象に実施した指導者質問紙調査の結果を研究の始期(6月)と終期(11月)で比較したものである。「再構築」のプロセスについての設問⑦⑧では、どちらも「当てはまる」と「やや当てはまる」を合わせた肯定的な割合が増加した。これは、研修を通して指導者が、児童生徒のよりよく「再構築」をする姿を明確にし、その姿の実現に向け見いだした視点を基に授業改善を行ったからだと考える。特に、設問⑦(A③)に関する設

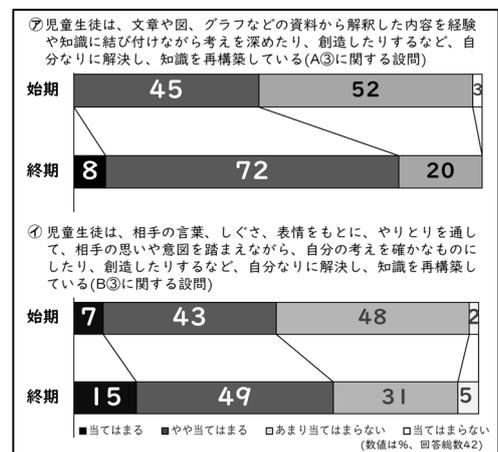


図21 指導者質問紙調査の結果

問)において、肯定的な回答の割合が2倍近く増加した。肯定的な回答の根拠として、「学習をする前と後で自己の変容を自覚した振り返りを書いていた」「1人1台端末で録画した動画を基に学びの様子を振り返り、学びを自己調整していた」といった記述が見られた。このことは、児童生徒が主体となる学習過程を重視したり、学びを可視化するなど1人1台端末を効果的に活用したりすることにより、児童生徒が自己の変容を捉えやすくなり、それがよりよく「再構築」をすることにつながったからだと考えられる。

「マネジメントシート」の記述から、第5回プロジェクト研究会を終えての授業づくりに対する研究委員の意識を図22に示した。研究始期の意識と比較すると、授業中の児童生徒の捉え方や授業づくりへの向かい方が大きく変容したことがうかがえる。

- ・「読み解く力」を、高め、発揮する児童生徒の姿を明確にイメージすることで、各教科等で目指す資質・能力の確かな育成につなげることができるようになった
- ・児童生徒の資質・能力の育成に向けて、単元計画や学習活動の検討ができた
- ・児童生徒が選択、判断をする場面を適切に設定することで、学びへの意欲が持続することが分かった。今後も「何を学んだのか」「どのように学んだのか」等を児童生徒が意識し、単元の終末において学びの手応えを感じる学習展開を考えていきたい
- ・単元を通した課題設定や毎時間の確かな積み上げ、視点を明確にした中間指導を意識して授業改善を行うことができた
- ・資質・能力を身に付けた児童生徒の具体的な姿を想定し、その姿を実現できるように各教科で関連させて授業や単元を構想することで、年間、単元、本時の授業を通しての「再構築」に繋がっていくと感じた
- ・よりよく「再構築」をする児童生徒を目指して、多様な情報を児童生徒が収集することに力を入れてきた。児童生徒は、ICTを活用し多くの情報を得ることで、自分の課題の解決に沿った情報を判断することができ、自信をもって考えを伝えることができていた
- ・実践では正直、うまくいかないこともあった。しかし、課題と向き合い、よりよくしようと継続して取り組んだことがよかった。日々の授業で「読み解く力」を意識して取り組むことで、児童生徒の「今日はたくさん考えて大変だったけど、楽しかった」という声を聞き、これまで児童生徒が受け身となる授業が多かったが、児童生徒がどう学ぶかを意識した授業へと変えることができてきていると感じた

図22 授業づくりに対する研究委員の意識(下線は筆者)

(2) 児童生徒の意識の変容

図23は、研究委員が指導者として「読み解く力」の育成に重点を置いた授業を行った児童生徒を対象に実施した児童生徒質問紙調査の結果を研究の始期(6月)と終期(11月)で比較したものである。

「再構築」のプロセスについての設問では、「当てはまる」と強く肯定する回答の割合が増加した。これは、前述した指導者の授業改善により、児童生徒は目的意識をもって主体的に学びを進め、よりよく「再構築」をすることができたからであると考えられる。また、「学びの実感」についての設問では、「問題を一人でも解けるようになった」「1人1台端末で蓄積した学びを振り返った時に、自分の成長を感じた」という記述が見られた(図24)。児童生徒が日々の授業でICTを活用し、よりよく「再構築」をすることを通して、学びを実感できるようになったことがうかがえる。このことを踏まえ、各教科等で目指す資質・能力の確かな育成に向け、今後も「読み解く力」の育成に重点を置いた授業づくりを継続して行うことが大切であると考えられる。

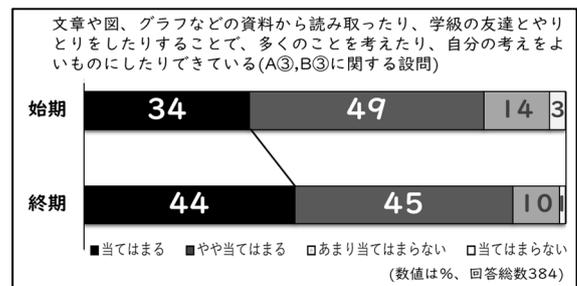


図23 児童生徒質問紙調査の結果

- ・授業を通して、友達の協力を得て解くことができた問題を一人で解くことができるようになった
- ・1人1台端末でこれまでの学習内容を振り返った時に、前は分からなかったけれど、今なら分かることが増えていて、自分の成長を感じた

図24 児童生徒質問紙調査における学びの実感に関する記述(下線は筆者)

Ⅶ 研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

- (1) 「読み解く力」の育成に重点を置いた授業において、児童生徒が主体となり、ICTを効果的に活用することで、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させ、よりよく「再構築」をすることにつながった。
- (2) 研修と実践の往還を通して見いだした、児童生徒がよりよく「再構築」をする授業づくりの視点を基に授業改善を行ったことにより、全ての児童生徒が学びを実感できる授業となり、各教科等で目指す資質・能力の確かな育成につながった。

2 今後の課題

- (1) 全ての教員が、児童生徒が主体となる授業づくりを継続的に行うことで、本県の目指す子ども一人ひとりの学ぶ力の高まり、確かな学力の向上へとつなげていく必要がある。
- (2) ICTを活用した授業づくりを進めたが、各教科等の見方・考え方を働かせた効果的なICTの活用を更に追究していくことで、「読み解く力」の育成をより一層促進させ、さらなる教科指導力の向上につなげる必要がある。

文 献

- 1) 文部科学省「小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 総則編」、平成30年(2018年)
 - 2) 文部科学省「中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 総則編」、平成30年(2018年)
- 滋賀県教育委員会「滋賀の教育大綱(第3期滋賀県教育振興基本計画)」、平成31年(2019年)

トータルアドバイザー

京都女子大学発達教育学部教授	水戸部修治
東京大学大学院教育学研究科教授	藤江 康彦

研 究 委 員

彦根市立金城小学校教諭	北川 彩
近江八幡市立八幡小学校教諭	塚本 有貴
高島市立本庄小学校教諭	川端 宣実
野洲市立野洲小学校教諭	角 憲幸
長浜市立余呉小中学校教諭	清水としみ
米原市立伊吹山中学校教諭	藤川 直子
草津市立玉川中学校教諭	中田 利恵
大津市立日吉中学校教諭	苗代 峻平
豊郷町立豊日中学校教諭	松谷 直宏
栗東市立栗東中学校教諭	明石 勇氣